

道聞き場面における日本語母語話者と日本語学習者の聞き手としての応答  
—「あいづち的発話」に着目して—

スケンデル＝リザトビッチ・マーヤ\*

Japanese Native Speakers' and Japanese Language Learners'  
Responses as Listener in Direction-Giving

— A Focus on Backchannels —

SKENDER-LIZATOVIC Maja

Abstract

This paper focuses on the responses of the listener, i.e. direction-seeker, in direction giving situation. It is an attempt to shed light on the language use in direction giving, seen in both native and contact situations. The results showed that a native direction-seeker uses a small and uniformed variety of backchannels, using mainly the “ha-type” which is recognized as respectful. Furthermore, with the strategic use of “a-type” and “repetitions” backchannels the native speaker expresses understanding and thus manages to control the development of the ongoing discourse. On the other hand, the backchannels of a learner direction-seeker vary considerably. Moreover, unlike in the native situations, the number of “a-type” and “repetitions” backchannels is rather low which gives the impression of the listener not understanding, not controlling or not being involved in the discourse development.

Keywords: direction-giving, contact situation, listener's responses, backchannels, discourse analysis

1. はじめに

道を聞くことは日常でよく遭遇する場面であり、特に外国では誰でも少なくとも一度くらい経験したことがあることである。道聞き場面の元となるのは日常生活で頻発している説明を請う場面であり、他の説明を請う場面と同様の特徴を示すと考えられる。一人の話者が情報取得者で、もう一人の話者が情報提供者という固定した話者役割で、情報提供者が情報を提供している間、情報取得者が聞いているという形であると考えられる。道聞き場面は頻繁に見られることから、語学教科書ではよく扱われている場面の一つである。その上、多くの場合は早い段階で導入されている。初級を終えた学習者は道聞き場面が必要とされる文法項目・表現ができるはずだが、実際に道を聞く時はどうなっているのだろうか。

日本語教科書の道聞き場面では「て形」や「命令形」などの文法項目や様々な語彙を導入することに重点が置かれていることが多い。したがって重点が道を教える側に置かれている。聞き手である道を聞く側は、単に道順説明を聞いている、受け身的な役割を果たしていると一般的には考えられる。しかし、談話における聞き手は伝達された情報の受け手であるが、その情報を理解し、解釈し、考え、想像し、推測するということによって積極的に談話に参加している。これは聞き手の頭の中だけで行われるものもあれば、うなずき、あいづち、質問、などという聞き手の応答として話し手にも分かる形で現れる場合もある。話し手が話を進めていくためには、聞き

---

キーワード：道聞き談話、接触場面、聞き手としての応答、あいづち的発話、談話分析

\*平成25年度生 比較社会文化学専攻

手の応答は必要であり、話しことばによるコミュニケーションは聞き手の積極的な参加によって成立すると指摘されている(堀口 1988)。道聞き談話も同じく道を教える側と道を聞く側の相互作用によって成り立っていることが言える。しかし、道を聞く側が母語話者でない場合、道を聞く側の聞き手としての応答がどうなるかはまだ十分に研究されていない。

そこで、本研究は母語場面と接触場面の道聞き談話のそれぞれの実態を明らかにすることを目的とし、道を聞く側の聞き手としての応答に着目し、比較分析を行った。

## 2. 先行研究

### 2.1 談話における聞き手の応答に関する先行研究

談話における聞き手の応答についての研究は多く、聞き手の応答の分類や表現形式(小宮 1986, 杉戸 1987)、また機能や形態(堀口 1988)についての研究が行われている。杉戸(1987)はまず、談話における聞き手の応答を「あいづち的な発話」と「実質的な発話」に大別し、小宮(1986)は「あいづち的な発話」をさらに「感声的表現」、「概念的表現」と「繰り返し」に分類している。堀口(1988)は聞き手の応答のうち、あいづち、先取り、確認を取り上げ、その機能と形態について考察した。

さらに、「あいづち的な発話」のみに着目した研究が多く行われ、「あいづち的な発話」は打つ回数も使う表現形式も人によって異なり、また談話の内容や相手との関係などによって変化することが指摘されている(堀口 1991)。「あいづち的な発話」が、定義、機能、タイミング、表現形式、頻度、変化などという観点から分析されているが、本研究ではその中の、特にあいづちとしての「あ」についての研究を取り上げる。古川(2010)はあいづちとして用いられる「あ」の機能を調べ、富樫(2001)の「新情報の獲得」と「同調」という二つの「あ」の機能を「知識・認識状態の変化の表示」という機能にまとめた。あいづちとしての「あ」は話し手の発話を受けて、聞き手の知識・認識の状態が変化したことを表す標識であると指摘している。

### 2.2 道聞き談話に関する先行研究

道聞き談話の特徴や構成を分析した研究として、英語母語場面のPsathas & Kozloff(1976)とPsathas(1986, 1991)の一連の電話における道聞き談話の研究と日本語母語場面の村上(1996)、大浜ら(1998)が挙げられる。以上の研究の結果をまとめてみると、道聞き談話はまず、段階的な構成を持ち、展開や構成要素においてパターンを示すこと、また、研究によって命名が違うが、道を教える側の発話が特定の「操作」(Psathas 1986, 1991)、「情報」(村上 1996)や「情報・環境」(大浜ら 1998)の連鎖から構成されていることが分かった。また、道聞き談話の特徴として、道を教える側が発話連鎖によって道順説明を作っていくこと、道順説明を聞いている間、道を聞く側は単なる聞いているという消極的な役割を果たすのではなく、理解や無理解を表明したり、確認や説明を要求したりすることによって道順説明の展開に大きな影響を及ぼしていることが明らかになった。

大浜ら(1998)では「あいづち」系列の出現環境という観点から道聞き談話における「あいづち」の談話展開上の機能を調査し、18名の日本語母語話者による367談話を分析した。その結果、「はい系あいづち」は「道教え開始環境」と「道教え中核環境」に顕著に出現し、予定通りの展開を促す機能を持ち、「あ系あいづち」は道教え終了環境と談話終結環境に多く出現し、談話終結を促す機能を持つと考えられる。「繰り返し」や「言い換え」のような「実質系あいづち」は談話を終結させないための「あいづち」であると報告している。

永田・大浜(2011)は道聞き談話における道を聞く側の「繰り返し」と「言い換え」に着目して、9名の日本語母語話者による184談話と10名の上級日本語学習者による180談話を比較した。その結果、日本語母語話者は提供された情報によって「繰り返し」と「言い換え」を使い分けられていると思われるが、日本語学習者の場合はそのような選択的な使用は見られなかった。また、日本語母語話者と日本語学習者の「繰り返し」と「言い換え」に対して受け手である母語話者がどう解釈しているかについて、相手が日本語母語話者の場合、「繰り返し」は情報が十分に伝達されたものとして、「言い換え」は情報の伝達が不十分であると認識されていることが分かった。相手が学習者の場合には反応にそれほど違いがなく、余剰的な情報提供がより多くなる傾向が見られた。

しかし、道を聞く側が日本語学習者の場合、聞き手としての応答はどうかはまだ十分に研究されていない。

大浜ら（1998）は母語話者の応答のみに、永田・大浜（2011）は上級日本語学習者の「繰り返し」と「言い換え」のみに着目し、学習者のそれ以外の発話また中級学習者の道聞き談話の特徴はまだ明らかにされていない。また、上記の研究では、それぞれの道順の始点と着点が異なり、したがって始点と着点の距離も異なる。さらに、道を聞く側が目的地までの行き方を実際に知っているかどうかの情報がない。また、一人の対象者が何回も「道を聞く」行為を繰り返す研究もある。これらの条件は道聞き談話を大きく左右すると考えられ、条件を統制する必要があると考えられる。特に母語場面と接触場面の比較するために、なるべく同じ場面設定で、同じ内容、つまり同じ道順にする必要があるのではないだろうか。

### 3. 研究課題

以上の点を踏まえて次の研究課題を立てた。

RQ道聞き談話における母語場面と接触場面の道を聞く側の聞き手としての応答はどう違うか。

### 4. 研究方法

#### 4.1 調査方法

##### 4.1.1 調査対象者

調査は2012年7月～10月に都内の大学のキャンパス内で行われ、母語場面15組と接触場面15組（計30組）を収集した。本調査の道聞き談話の会話参加者は、一人の道を教える側と一人の道を聞く側という固定した役割の話者である。学習者の方が道を聞く側になる可能性が高いと考えられ、接触場面の場合、学習者が道を聞く側になっている。道を教える側は母語場面の15名（以下DGN<sup>1</sup>とする）と接触場面の15名（以下DGCとする）、計30名の日本語母語話者で、全員調査が行われた大学の学部生である。母語場面の場合、道を聞く側は15名の日本語母語話者（以下JNSとする）で、他大学の学部生である。接触場面の道を聞く側は日本語学習者（以下NNSとする）で、日本滞在歴1年以内、N2レベル相当の留学生（修了生含む）15名である<sup>2</sup>。

##### 4.1.2 調査資料

説明される道順説明のルート長さや形は道聞き談話の流れを大きく左右すると考えられる。そこで、会話で説明されるルートの一つにした。また、親疎関係や上下関係などの要因からの影響をコントロールするため、会話の参加者のペア同士はお互い面識のない、同等な関係の大学生とした。道を教える側は調査が行われる大学に所属する学生で、道を聞く側は、その大学に来たことがない学生、及び留学生となるように、会話のペアを設定した。収集された談話のうち、録音が不明瞭なものや指定されたルートと違うルートが説明されたものもあり、それを除くと、本研究の分析資料になったのは母語場面12組と接触場面12組（計24組）である。

##### 4.1.3 調査手順

本調査では会話の開始する前に本研究の目的や調査手順を説明し、データ収集の協力と録音の同意を得た上で調査を開始した。ペアが会話をするまでの手順は以下の通りである。道を聞く側は控室で調査者による口頭での説明<sup>3</sup>を受けて待機する。道を教える側は出発点のところで口頭で説明を受けて道を聞く側を待つ。会話が終わった後、道を聞く側は実際に目的地まで行くように指示された。

#### 4.2 分析方法

杉戸（1987）は談話における聞き手の発話を「あいづち的発話」と「実質的発話」に大別している。「あいづち的発話」とは実質的な内容を積極的に表現する言語形式（単なる繰り返し以外の名詞、動詞など）を含まず、また判断・要求・質問など聞き手に積極的な働きかけもしないような発話と定義されており、応答詞や感動詞など実質的な内容を表さない言語形式や繰り返しもそのような発話に含まれる。一方、「実質的発話」とは「あいづち的発話」以外の種類の発話であり、何らかの実質的な内容を表す表現形式を含み、判断、説明、質問、回答、

要求など事実の叙述や聞き手へのはたらきかけをする発話」とされている(杉戸 1987: 88)。

小宮(1986)は応答表現の中で、話し手の発話に対し、自由意志に基づいて、肯定・否定の判断を表明することなく、単に「聞いている」「分かった」という意味で用いられるものを「あいづち」とし、そのような発話をさらに「感声的表現」、「概念的表現」と「繰り返し」に分ける。「ハイ」「エー」「ン」などのように、指す概念を持たず、それ自体で直接に話し手の感情を表す表現を「感声的表現」としてまとめる。一方、もともとは概念を表す言語形式であるが、「ナルホド」「ホント」のように現在は感動詞的にも使われるような表現を「概念的表現」としてまとめている(小宮 1986)。なお、「繰り返し」を話し手の発話の一部を繰り返すものとしている。小宮(1986)では「繰り返し」と「言い換え」を区別していないが、両者の区別をしている研究もあり、本研究では「言い換え」が3回のみ出現であるため、「繰り返し」と「言い換え」の区別をしない立場をとる。なお、相手の言ったことが理解できなかつたり、聞き取れなかつたりした時に相手の発話を繰り返す場合や、相手の応答を求めるため、相手の発話を繰り返す場合もある。その場合は説明要求あるいは確認要求として、「あいづち的発話」とは違うものであると考える。本研究では、「～ですか?」のように上昇型のイントネーションを伴う「聞き返し」、または説明要求や確認要求という相手への働きかけをする「繰り返し」を「あいづち的発話」から除くことにした。また、「感声的表現」と組み合わせさせたものは「繰り返し」であると判断する。

表1は上記した二つの分析枠組みをまとめたものである。表1の分析枠組みに沿って道を聞く側の応答を分類する。

表1 道を聞く側の応答全体の分析枠組み(小宮 1986, 杉戸1987をもとに作成)

聞き手の応答		定義	使用例
あいづち的発話	感声的表現	指す概念を持たず、それ自体で直接に話し手の感情を表す表現 「ハイ」「エー」「ン」	O: あのことまっすぐ: こっち右手の方 [に行ってもらおうと] K: <u>はい</u> O: あの 図書館あるんですけど: K: <u>はい</u>
	概念的表現	もともとは概念を表す言語形式であるが、感動詞的にも使われる表現 「ナルホド」「ホント」	O: そうすると もう〇〇堂がすぐ K: <u>なるほど</u>
	繰り返し	話し手の発話の一部を繰り返したもの	O: 附属図書館の前 を通り過ぎるんですけど: K: <u>附属図書館</u>
実質的発話	判断、説明、質問、回答、要求など	実質的な内容を表す表現形式を含み、事実の叙述や聞き手へのはたらきかけをする発話	O: もうちょっと歩いてください [て K: <u>協ってそこの前ある?</u> [生 O: あっそうです

## 5. 結果と考察

### 5.1 応答全体

まずは杉戸(1987)と小宮(1986)の定義に沿って、道を聞く側の発話を「あいづち的発話」と「実質的発話」、そして、「あいづち的発話」をさらに「感声的表現」、「概念的表現」、「繰り返し」に分ける。表2はJNSとNNSの応答全体をまとめたものである。

道を教える側の発話に対し、道を聞く側の応答がJNSの場合は302回、NNSの場合は318回観察された。JNSの発話の場合は「あいづち的発話」が249回(83%)で、「実質的発話」が53回(17%)である。「あいづち的発話」の内訳を見ると、「感声的表現」が181回(60%)、「概念的表現」が8回(3%)、「繰り返し」が60回(20%)である。NNSの発話の場合、「あいづち的発話」が264回(83%)で、「実質的発話」が54回(17%)である。「あいづち的発話」の内訳を見てみると、JNSと同じく「感声的表現」の回数が226回で一番高く、71%を占めている。次に「繰り返し」が27回で9%を占めており、これはJNSの「繰り返し」の割合の半分である。「概念的表現」

表2 道聞き談話における道を聞く側の応答（比較）

	あいづち的発話 (合計)			実質的発話	合計
	感声的表現	概念的表現	繰り返し		
JNS	181 (60%)	8 (3%)	60 (20%)	53 (17%)	302 (100%)
	249 (83%)				
NNS	226 (71%)	11 (3%)	27 (9%)	54 (17%)	318 (100%)
	264 (83%)				

が11回（3%）観察された。

以上の結果から見られるように、道聞き場面において道を聞く側の応答は殆ど「あいづち的発話」である。そのうち、「感声的表現」とそれに続き「繰り返し」が一番多く使われ、道聞き場面におけるこれらの役割の重要性がうかがわれる。

### 5.2 「あいづち的発話」の分類

「あいづち的発話」のそれぞれの分類は談話上に異なる機能を持つことが指摘されているため、次に「あいづち的発話」を分類別に比較する。その際、「感声的表現」を「ハ系」「ン系」「ア系」あいづち詞に分類する。図1を見ると、NNSはJNSより「ハ系」あいづち詞をやや多く使用することが分かる。また、JNSに1回のみ観察された「ン系」あいづち詞は20回使用された。「ア系」あいづち詞の場合、使用回数から見ると、NNSの方がやや多く使用しているように見える。しかし、使用人数から見ると、JNSの9名に対しNNSは5名である（表3参照）。またNNSの場合、使用した5名のうち、3名が合わせて23回使用している。つまり、3名が多用しているということである。「概念的表現」において、「ワカリマシタ」の場合は差が見られなかったが、NNSは「ワカリマシタ」以外の「概念的表現」を使用することが分かる。前節で見たようにNNSの繰り返しがJNSの使用回数の半分であることが分かる。

表3 種類別使用人数（比較）

種類		JNS	NNS
感声的表現	ハ系	11	12
	ン系	1	6
	ア系	9	5
	その他	2	2
概念的表現	ワカリマシタ	7	6
	その他	0	3
繰り返し		11	10

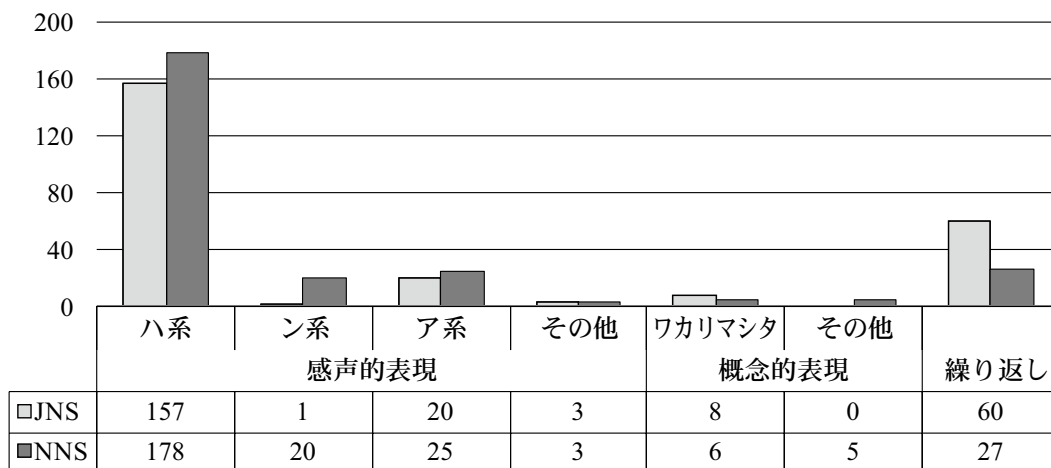


図1 「あいづち的表現」の分類別使用回数（比較）

### 5.3 「あいづち的発話」の表現種類

最後に「あいづち的発話」の表現種類を比較する。

JNSの場合、「あいづち的発話」として使用された表現は合計8種類である。「感声的表現」の表現種類が一番多く見られ、「ハイ」「ウンウン」「ア」「アハイ」「オ」「フン」という6種類である。「概念的表現」の場合、談話終結環境に現れる「ワカリマシタ」のみが見られた(表4参照)。NNSの場合、「あいづち的発話」として使用された表現は14種類が見られた。「あいづち詞」の表現種類は8種類で、「ハイ」「ハイハイ」「ウン」「ウンウン」「ウンハイ」「オッケー」「ア」「アハイ」という表現種類である。「概念的表現」の場合、「ワカリマシタ」以外に「ソウ」「ソウカ」「ソウデスカ」「ナルホド」という、合わせて5種類が見られた(表5参照)。まとめてみると、JNSの8種類に対し、NNSでは14種類が見られた。一人にしか使われていない種類を除いてみると、JNSの5種類に対して、NNSは9種類を使用したことが分かる。

表4 JNSの「あいづち的発話」の表現種類及び使用回数

	種類	使用回数	
感声的表現	1	ハイ	157
	2	ウンウン	1
	3	ア	15
	4	アハイ	5
	5	オ	2
	6	フン	1
概念的表現	7	ワカリマシタ	8
繰り返し	8	繰り返し	60
計		249	

表5 NNSの「あいづち的発話」の表現種類及び使用回数

	種類	使用回数	
感声的表現	1	ハイ	169
	2	ハイハイ	9
	3	ウン	17
	4	ウンウン	2
	5	ウンハイ	1
	6	オッケー	3
	7	ア	5
	8	アハイ	20
概念的表現	9	ワカリマシタ	6
	10	ソウ	2
	11	ソウカ	1
	12	ソウデスカ	1
	13	ナルホド	1
繰り返し	14	繰り返し	27
計		264	

### 5.4 JNSの応答の結果のまとめと考察

他の場面において「感声的表現」の種類を豊富に使用するJNSは道聞き場面では主に「ハ系」あいづち詞と「ア系」あいづち詞を使う。「ハ系」あいづち詞の場合、これは場面設定が原因であると考えられる。会話の話者は同等関係であるが、お互いに面識のない相手に対して「ハ系」あいづち詞を使用するのが最も丁寧度が高いからである。「あいづち的発話」の表現形式が談話の内容によって変化することは様々な研究(堀口1991)でされており、「ア系」あいづち詞の使用は道聞き談話自体の特徴から来ていると考えられる。「ア系」あいづち詞の使用にはどのような特徴があるのだろうか。

次の会話例1を見てみよう。食堂の外見の説明を聞いて、道を聞く側のJNSが「アハイ」を使用し、聞いたことを理解していること、またそれ以上の説明は必要ではないということを表明していると考えられる。

会話例1：母語場面12

14 DGN そうしたら食堂があるんですけど：

15 JNS はい

16 DGN ガラス張りなので外から(.)中が  
[食堂っていうのは [分かるんですが

→17 JNS [はい [あはい

堀口 (1988) のあいづち機能の分類から見ると、この会話例に現れる「アハイ」は単なる「聞いているという信号」だけではなく、「理解している信号」でもあると言える。また、古川 (2010) は「ア系」あいづち詞は話し手の発話を受けて、聞き手の知識・認識の状態が変化したことを表す標識であると指摘している。なお、大浜ら (1998) では道聞き場面における「ア系」あいづち詞は談話終結を促すという積極的な機能を持つと思われる。

以上のことから、道聞き場面において「ア系」あいづち詞は「今まで聞いたことを理解したので、次に移っていい」というサインとして使われ、大事な役割を果たしていると言える。「ハ系」あいづち詞を送る場合、この「理解している」側面がはっきり分からないことが多いので、道を教える側が次の情報に移らず、過剰な繰り返しをしたり、過剰な情報を与えたりする可能性がある。そのような理由で、道聞き談話において、理解を示すため、「ア系」あいづち詞を使うほうがより効率的であると考えられる。

「感声的表現」に続いて、JNSの道を聞く側の応答に一番多く見られたのは「繰り返し」である。話し手の発話の一部または全部を聞き手が繰り返すことがある。繰り返すことは、相手の話を「聞いている」ということの表れであるので、これも「あいづち的発話」に分類される。聞き手は、話し手の発話の中で特に関心を持った部分を繰り返し、またそれによって理解や驚きの信号を送ることもできると思われる (堀口 1988)。道聞き談話の場合、道を聞く側が道教えにおいて一番大事だと思った部分を繰り返すと考えられる。また、それによって、「ア系」あいづち詞と同じく、「理解している」という信号を送っていると考えられる。永田・大浜 (2011) は道聞き談話における日本語母語話者の「繰り返し」の使用を調べたところ、情報が十分に伝達された時、特に「距離」と「手段」という情報に対して、日本語母語話者が「繰り返し」を使うことが分かった。また、受け手である道を教える側も情報が十分に伝達されたことを察知して、次の話に移っていることが分かった。

堀口 (1988) によれば、相手の発話全てを繰り返すのは、3つ以下の自立構成要素を含む、短い発話に限られており、全体的繰り返しより部分的繰り返しの方が多い。本調査の資料では自立構成要素が1つの「繰り返し」もあり、2つや3つの自立構成要素のものもあった。また、道を教える側の発話をそのまま繰り返すのではなく、表現を少し変えたり (会話例2)、例は少ないが「言い換え」を使ったりするケースもあった (会話例3)。

#### 会話例2：母語場面05

14 DGN そこを右に [行っていただいて  
→15 JNS [右に行くと

#### 会話例3：母語場面11

56 DGN (.) え：とちょっと8階建ての建物が  
→57 JNS はい [高めの  
58 DGN [があって はい  
59 JNS はい

### 5.5 NNSの応答の結果のまとめと考察

道聞き場面におけるNNSの応答の一番顕著な特徴は、「あいづち的発話」、特に「感声的表現」が多用されていることであると言える。上級になっても「あいづち的発話」の使用回数が低いということを様々な研究 (堀口 1990) が指摘しているが、永田・大浜 (2011) の上級以上の学習者と同じく、本研究のNNSも道聞き場面において「あいづち的発話」、特に「感声的表現」を豊富に使っていることが分かった。

「あいづち的発話」の表現種類に関しては、「感声的表現」の表現種類が多く、一人か二人のみが使う表現が殆どである。また、設定された場面にふさわしくないとと思われる「ハイハイ」あいづち詞や、「感声的表現」の分類から見ると、「ン系」あいづち詞の使用も見られた (会話例4、5)。

会話例4：接触場面13

- 15 DGC あの：食堂のすぐ右に階段があるので [そこ一度おりていただいて：  
→16 NNS [はいはい  
17 NNS はい  
18 DGC 右に曲がっていくとまたすぐ階段があるので  
→19 NNS はいはい

会話例5：接触場面10

- 36 DGC hhなんかまっすぐ行って  
→37 NNS うん  
38 DGC 階段おりておりて（.）右で  
→39 NNS うん

道聞き場面の談話展開において重要な役割を果たす「ア系」あいづち詞の場合、使用人数が5名で、そのうちの3名が「ア系」あいづち詞を多用し、残りの2名が一回のみ使用した（表3参照）。使用者人数が少ないことから、殆どの学習者が道聞き場面における「ア系」あいづち詞の機能と重要性を完全に把握していないと考えられる。

「繰り返し」の場合、殆どのNNSがこれを使用しているが、回数が少ないことが分かった。また、自立構成要素が1つのものが殆どであり、道を教える側の表現を変えず、そのまま繰り返している（会話例6）。

会話例6：接触場面05

- 15 DGC まっすぐ行く [まっすぐ行くと  
→16 NNS [まっすぐ

道を教える側の発話から重要な情報を選択し、また自分からそれを繰り返す方が、ただ「ハイ」と言うより難しいのではないだろうか。道を教える側の観点から見ると、聞き手であるNNSは実際に道順説明を理解しているかどうかが不明であろう。また、自分の発話をどのような方向に修正した方がよいかという手掛かりがなく、道を教える側の方が会話の展開をコントロールしているという印象を受ける。

## 6. 結果と考察のまとめ

本研究では道を聞く側の応答、特に「あいづち的発話」に着目し、母語場面と接触場面を比較した。その結果、まず両方の場面で「あいづち的発話」の使用割合が高いことが分かり、道聞き談話における「あいづち的発話」が重要であるということが分かった。「あいづち的発話」を詳しくみると、NNSの「感声的表現」の使用回数がやや高く、「繰り返し」の使用回数はJNSの半分である。また、「感声的表現」の種類においてJNSは主に「ハ系」と「ア系」のあいづち詞を使用している。NNSの「感声的表現」にはばらつきがあり、JNSに比べて「ア系」あいづち詞の使用人数が少なく、またJNSには1回のみ見られた「ン系」あいづち詞も使用していることが分かった。「繰り返し」の場合、JNSの方が豊富に使っているだけではなく、NNSの「繰り返し」より長い「繰り返し」を使ったり、まとめや言い換えをしたりしていることも分かった。

以上の結果から、道を聞く側であるJNSはまず「感声的表現」の種類を選び方に関して場面意識を持つのではないと思われる。また、JNSは道教えをただ聞いているのではなく、「繰り返し」や「ア系」あいづち詞によって情報が十分に伝達されたことをはっきり表明し、道を教える側の次の発話、会話の展開をコントロールしていると考えられる。

一方、NNSの道を聞く側の応答では「繰り返し」と「ア系」あいづち詞が少なく、理解していることがはっきり示されていない「ハ系」と「ン系」あいづち詞の多用が見られた。なお、このような場面設定では「ン系」



あいづち詞の使用がふさわしくないとされる。JNSのように、道を教える側の発話を繰り返したり、まとめたりするのが困難であるため、ただ「ハイ」を打つ、短い「繰り返し」をするのではないだろうか。

以上のことから、道聞き談話における母語場面と接触場面の道を聞く側の応答には違いがあることが明らかになった。また、道聞き談話において「あいづち的発話」、特に、理解していることを示す「繰り返し」と「ア系」あいづち詞が重要であること、つまり聞き手の重要性が再確認できたのではないだろうか。

## 7. 今後の課題

本研究では道聞き談話における母語場面と接触場面のそれぞれの特徴を明らかにしたが、規模が小さく一般的な結論を導き出すことが出来ない。まず、調査対象者に関して、本研究の道を聞く側のNNSの対象者を、国籍を問わず日本滞在歴1年以内の中級日本語学習者にしたが、母語、学習環境や日本語学習歴の長さの影響を防ぐため、これらの条件も統一する必要がある。また、今回は道を聞く側の「あいづち的発話」のみに着目したが、「実質的発話」の種類や出現環境にも特徴があると考えられる。そのため、今後はこれらの発話も分析に含め、道聞き談話全体を明らかにするため、詳しく分析していきたい。

## 註

- 1 母語場面では道を教える側をDGN (Direction Giving Native situation)、道を聞く側をJNS (Japanese Native Speaker) とする。接触場面では道を教える側をDGC (Direction Giving Contact situation)、道を聞く側をNNS (Non-Native Speaker) とする。
- 2 NNSの国籍はタイ人5名、ベトナム人3名、台湾人3名、フランス人2名、イタリア人1名、アメリカ人1名である。
- 3 目的地を教えた後、出発点にいる通行者(道を教える側の協力者)に自己紹介などせず、なるべくいつも通りに道を聞いて、一人で目的地まで行くように指示した。

## 参考文献

- 大浜るい子・山崎深雪・永田良太(1998)「道聞き談話におけるあいづちの機能」『日本語教育』96, 73-84.
- 小宮千鶴子(1986)「あいづち使用の実態－出現傾向とその周辺－」『語学教育研究論叢』3, 43-62.
- 杉戸清樹(1987)「発話のうけつぎ」『国立国語研究所報告92 談話行動の諸相－座談資料の分析－』68-106.
- 富樫純一(2001)「情報の獲得を示す談話標識について」『筑波日本語研究』6, 19-41.
- 永田良太・大浜るい子(2011)「道聞き談話における日本語母語話者と日本語学習者の言語行動の比較--「繰り返し」と「言い換え」に着目して」『教育学研究ジャーナル』8, 41-50.
- 古川智樹(2010)「あいづちとして用いられる「あ」の機能」『言葉と文化』11, 237-253.
- 堀口純子(1988)「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』64, 13-26.
- 堀口純子(1991)「あいづち研究の現段階と課題」『日本語学』10(10), 31-41.
- 村上恵(1996)「[道順説明]の構成要素と表現類型」『三重大学日本語学文学』7, 94-30.
- Psathas, G. & Kozloff, M. (1976) The structure of directions, *Semiotica*, 17(2), 111-130.
- Psathas, G. (1986) The organization of directions in interaction, *Word*, 37, 83-91.
- Psathas, G. (1991) The structure of direction-giving in interaction, In D. Boden & D. H. Zimmerman (Eds.), *Talk and social structure*, Cambridge: Polity Press, 195-216.